

## 12、(十訓抄による)

人は思慮することなく、言つてはいけないことを口にすぐに出したり、人の短所をばかにしたり、(人の)やつたことを非難したり、隠していることをあけすけに言つたり、(人にとって)恥ずかしいと思われることを問い合わせたりする、というようなことはすべてあつてはならないことである。

自分ではなんとなく言いふらしていて、気にも留めなかつたようなことでも、言われた人が、深く思い込み、怒りが激しくなつてくると、思いもよらないときに、恥をかかされ、我が身の終わりとなるほどの大事になることもある。

## 13、(北越雪譜による)

ある年の夏、江戸から旅をしてきた俳人を家に泊めたとき、

「ここ越後の国があちこちを見て歩いたとき、資産家の家の庭には手をつくした立派な庭もあるのに、垣根はどの家のものも粗末なつくりで一時的に作ったようなものばかりだがなぜなのですか。」と言わされた。

「疑問に思われるのももつともです。垣根を一時的なつくりにしているのは雪が理由です。

なぜかというと、垣根を強くつくつても3m以上の雪に押しつぶされてしまうので、簡便につくつておいて雪が降り始めると垣根を取り除くのです」と答えたことがあつた。

## 14、(醒睡笑による)

小僧さんがありました。

夜がふけてから長い棹をもつて、庭をあちらこちらと(棹を)降りまわしております。

(師匠の)僧がこれを見つけて、「それは何をしているのか」と尋ねました。

「空の星がほしいので、(棹で)打ち落とそうとするのですが落ちないのです」と(小僧は答えました)。

「ほんとうに頭の悪いやつだ。そんなに工夫がなかつたらダメではないか。そこ(庭)からだと棹が届かないだろう。屋根へあがつてみろ」と(僧は)おっしゃつた。

弟子の小僧はともかくとして、師匠の僧の教えはありがたいものだ。

星をたつた一つでも見つけた夜のうれしさは月を見つけたうれしさにまさるなあ、梅雨の空だと・・。

## 15、(閑田文草による)

春に遊ぶものの中で蝶が軽やかに菜の花のところを飛び回つている様子を見るのは誰かの夢のように思われて趣があるものだが、蜂が晴れた日の日差しの中を何かあつたかのように歌つて遊んでいる様子はよりいつそう気持ちよさそうである。しかし、しゃくにさわる針があるのはいかがなものか。カエルが人目を避けて小さな声で鳴く様子は趣があるが、これもやがてはやかましくなってしまう。

総じて何事も勢いが盛んな時の様子を褒めたたえるものだが、これが古今和歌集以後、春のものとして詠まってきたことはまことにもつともなことだなあ。

ね。それでは（罰として）歌を詠んでください。」と言うので昔から（私は）阿弥陀如来の誓いを立てて、（地獄の煮える者を救うように）煮える物をすくうのですよと詠んだことであるよ。

## 16、（徒然草第七十八段）

珍しい最近の事柄を、もてはやして、言い広めるのも、また納得できないことだ。

世間で言い古されるまで、知らないでいる人は奥ゆかしい。今、新しく来た人がいる時に、仲間内で話し慣れている話題や物の名前などを話し、そのことを良く知っている仲間だけに分かるように、話の一部分だけを語り合つたり、顔を見合わせて笑つたりする。

（そうやつて内輪向けの話に終始して）事情を良く知らない人に嫌な思いをさせるのは、世間知らずの立派ではない人たちがよくやることである。

## 17、（古本説話集による）

今となつては昔のこと、藤六という歌詠みが、

他人の家に入つて、主人もいない時間をみつけて入つたのだ。

（家の中の）鍋で煮ていたものを、すくつて食べていると、

主人である女が、水を汲んで、（朱雀）大路のほうから来て

見てみると、（藤六が）このようにすくつて食べていたので、

「どうして、こんな人もいないところに入つて、こんなことをする者が来たんでしょう、あら情けない、藤六さんじやないか

## 18、（竹取物語より）

竹取の翁が心乱れて泣き伏しているところに近寄つて、かぐや姫が、「私も心ならずしてこのように出で参りますので、せめて天に上つていくのだけでもお見送りください」と言うものの、「いつたい何のために、ただできえこんなに悲しいのにお見送りするというのか。私にどうせよというおつもりで捨ててお上りになるのか。ぜひ連れて行つてください」と泣き伏すので、かぐや姫も心乱れてしまう。

「手紙を書き置いて参りましよう。恋しく思つてくださる折々に、取り出して御覧になつてください」と言つて、泣きながら書いたことばは、

この国に生れたのであれば、お爺様お婆様を悲しませないころまでごいっしょに過ごさせていただくべきですが、

それもできずお別れすることは、重ね重ねも不本意で残念に思います。脱いで残しておく着物を、私の形見と思つて御覧ください。月が出る夜には、御覧になつてください。

お二人をお見捨として参ります空から、落ちてしまいそうな気がいたします。

と書き置く。

中村惕斎先生という方は、京都の人で、幼少の頃から学問が好きで、朱子学を尊んだ誠実な眞の儒学者である。

ある時、近隣の家から失火したところ、その時惕斎先生の家は、火事の風下であつたので、親戚や隣人たちが驚いて集まつてきた。するとあつという間に風の向きが変わつて、惕斎先生の家は風上となつた。もう今は火事が燃え移つてくることもないと、集まつたみんなが安心していると、惕斎先生だけが、逆に心配そうな顔色になつてゐるので、みんなは不思議に思つて、その理由を尋ねたところ

「その火事が起きたあたりの人々は、今まで風上だつたので、火が燃え移つてくることはないと油断していたはずなのに、急に風向きが変わつたのでは、さぞ慌てふためき、どうしたらよいのか分からなくなつてゐることだろうと、心配なのです。」と答えられた。

そのことによつて、集まつてきていた人たちもみんな同感して、「急いで火事の現場に行き、火を防いで助けてあげよう」と、ある人がいつた。

## 20、(十訓抄による)

ある国の王が、隣国を攻めようとしていた。

老臣がそれに対し、あらためるようこう言つた。

「庭の榆の木の上に、蟬が露を飲もうとしていました。その蟬は後ろにかまきりがとらえようとしているのを知りません。

ん。

かまきりも蟬だけを見つめて、うしろにすすめがとらえようとしているのを知りません。

すすめもかまきりだけを見つめて、木のもとで弓を引いている子どもがとらえようとしているのを知りません。

子どももすすめだけを見つめて、前に深い谷、うしろに掘り株があるのを知らないで、身をあやまつてしまつた。

これらすべては、目の前の利益だけを見ていて、うしろの害を気にかけなかつたからです。」と話した。

王は、この時、心が動き、隣国を攻めようということを、とどまつた。